

第1号(2008.07.22 配信)

国際協力サロンが始動して間もなく、代表の吉満さんからサロンの各種お知らせとは別に、サロンから広く発信する機会を創りたいという相談がありました。サロン応援団の一人というより賛同メンバーとして相談に応じたところ、吉満さんの希望はレター形式で、できれば定期的に課題提起に通じ広くアピールするメールを発信しようということです。定期的にとは毎月少なくとも1回、代表者の吉満さんの名前でなく書き手の実名でもペンネームでも何でも、という話です。サロンにとって大事な機能の一つになりそうですからよく考えたうえで、よし、こうしよう、と決め、第1号を発信いたします。内容は、(1) 国際協力に関連する出来事や話題 (2) 課題提起につながるかどうかは別として、時の話題・トピック (3) メールは世界を駆けめぐりますから、海外・途上地域からの便りや情報の紹介。以上の3点が主です。サロンの活動について、吉満さんたちからリクエストがあればできるだけ受け止めることにします。

さて、今月の話題は？やはり、何といっても洞爺湖サミットでしょう。TV、新聞があれば毎日のように特集や映像、記事を組んだのですから。それにしても成果！は何だったか？となると、地球温暖化について共通認識を持ってこれから対応していくという流れができた、ということでしょうか。具体的な数字や目標はなくすべてはこれからです。

G8と呼ばれる主要8ヵ国に加え、BRICs中の中国(C)、インド(I)など、中進国、途上国の8ヵ国が加わり、地球上の二酸化炭素排出量の4分の3近くを占める16ヵ国が一堂に会し共通目標を論じ合ったのは、画期的だったといえるかもしれません。しかし、途上諸国が訴えた原油高、食料高には聞く耳はあったものの打つ手なし、効果なしに終わりました。

私がTVで強く印象に残ったのは、唯一の女性首脳だったドイツのメルケルさんがサミットが終えた直後の会見で「今や一国で解決できる問題は何も無い。国際協調で合意していく以外にない」と発言したことでした。

もうひとつ、私が最大の成果だったと思うのは、サミット前後を含むあの一週間余何ごとも何の事件も起きなかったことです。今月初めから東京都内は官庁街、ホテルや主要ビル、都庁全域、JRや地下鉄の各駅、車内まで警官の姿がすごく目立ちましたが、何も起きなかったのは幸いでした。英字紙に今回のサミットに要した経費が2年前のグレンイーグルス・サミットの3倍以上だったと書いてありました。ロンドンでのテロ事件が教訓だったはずですが、その大半は警備の動員費用とのことでしたから。そうだったからか、といってしまうと実もフタもない、何事もなくよかったと素直に安堵しましょう。

温暖化関連でいえば、東京都が全国で初めて大規模事業所に二酸化炭素の排出削減を義務づける条例を成立させました。福田内閣はセクター別アプローチと称し、産業界の自主性に頼る方向で財界とかねてから協議しています。このままでは東京都と国とで方針が食い違いませんか？それでいいのでしょうか？

それよりも私がどうも納得できないのは基準年の論議です。1997年に日本が努力を傾注して成立させた「京都議定書」は、08～12年の温室効果ガスの平均排出量を90年比で何%減らすかを国別に義務づけました。EU(欧州連合、当時の15ヵ国は今日27ヵ国に)は、以来EU全体としてこの義務づけに沿って排出量を抑え続けています。日本は05年の段階で90年比6%削減の義務を横目に、逆に8%増やしています。アメリカはブッシュ政権になって京都議定書から脱退し、いわば野放しの状態が続いています。

基準とした90年は今から20年近く前。今なお基準年とするには非現実的だといえば、なるほどそう感じ取れます。しかも排出量が急増しつつある中国やインドなどの諸国が対象に入っていない。日本は基準年の見直しを提案し、例えば05年を基準年として新たな削減目標を論議しようとしています。そうすると、京都で決めた義務づけは何だったのか。減らそうとの努力は、無為ではなかったはずだがどう評価できるのか。野放しは容認してしまうのか。腑に落ちない気がしてなりません。

洞爺湖サミットでは二酸化炭素の排出量を2050年に半減とか、先進国はもっと減らすべきだ等々が威勢よく語られました。けれども中期目標さえおぼろげで、またそのうちに前の基準年は非現実的だという議論の繰り返しになりはしないかと憂えます。そして本当にそのうちに、地球が取り返しがつかないダメージを受け、生物多様性の危機から人類の危機へと向かう恐れが現実化するのではないかと心配です。

最初の発信メールにしては長すぎましたか？きょうの話はこの辺で区切ります。次回はもう少し面白い話題を発信できるようにしたいと思います。

第1号の末尾に、発信者のネームについて、実名もペンネームも面映いというか避けたいというか。国際協力人の一人ですから、「国際」をぜひ姓にしたい。JICAが各種の願書・申請書等に例示する「国際太郎」「国際花子」もいいなと思いましたが、JICAが様々な公的機会に多用している例示を無断で借用するのは、場合によっては公務の妨げや意匠の乱用だの、本意に反する問題になりかねません。太郎でなく次郎ならばと思いましたが、先日の大阪の「食いだおれ・太郎」と「次郎」の並立！を見て、次郎は近すぎる！ならば「サブロー」は？三男となればちょっと遠く、ちょっと控え目で。サロンからの発信者に見れば、サとロの2字がある。

そこで結論。「国際サブロー」に決めました。サブロー？ことによると「千葉ロッテ」のファン？いえいえ、吉満さんとはフランチャイズが違いますので。

今後ともご愛読とご提案、ご意見を、よろしく願いいたします。

(7月17日記。国際サブロー)